

日露戦争				
出版社	頁	項目名	記述	コメント
大阪書籍	158～ 159	日露戦争	<p>義和団事件後、ロシアは満州(中国東北部)に軍隊をとどめ、清や朝鮮への影響力を強めようとした。そのため、朝鮮に勢力をのぼそうとしていた日本は、ロシアとの対立を深めました。イギリスは、ロシアの南下をおさえるために日本に接近し、1902(明治35)年に日英同盟を結びました。日本国内ではロシアと戦おうという意見が強まりましたが、社会主義者の幸徳秋水やキリスト教徒の内村鑑三たちは、戦争に反対しました。のちに与謝野晶子も戦争に関する詩を発表しました。</p> <p>日本は、満州はロシアの、朝鮮は日本の支配下におくという交渉をロシアと行いましたが、両者の対立は大きく、1904年、日露戦争が始まりました。戦争は、満州を中心にはげしい戦いが行われ、多くの死傷者が出ました。また、日本海でも両国の艦隊が戦い、日本軍が勝利しました。戦争が長引くと、日本は資金が続かず、兵力、武器・弾薬がとぼしくなりました。ロシアでも皇帝の専制政治に反対する革命運動が起こり、両国とも戦争を続けることが難しくなりました。</p>	<p>日露の帝国主義的膨張政策が日露戦争の原因であることが明確になっている点は評価できるが、満州とともに朝鮮も日露戦争の主戦場であった点がまったく触れられていない。</p> <p>註ではあるが、日露戦争における日本の勝利に対するアジア諸国の反応が肯定的側面のみ取り上げられている点は問題ではないか。肯定・否定両面から考えさせるような記述が必要である。</p> <p>【総論】参照。</p>
	159	ポーツマス条約と満州経営	<p>1905年、アメリカのポーツマスで、アメリカ大統領のなかだちで講和会議が行われ、ポーツマス条約が結ばれました。条約では、朝鮮における日本の優越権を認めること、樺太の南半分やロシアが清から借りていた旅順・大連、ロシアが満州に建設していた鉄道の一部や炭坑などを日本にゆずることが決められました(注)。</p> <p>(注)日露戦争でアジアの国である日本がロシアを破ったことはトルコ・アフガニスタン・ベトナム・フィリピンなどのアジア諸国に刺激をあたえ、近代化や民族独立運動を盛り上げました。</p>	

教育出版	129	日英同盟の成立	<p>日清戦争後、ロシアは、遼東半島に強大な軍事基地を築きました。そして、義和団事件のときには、満州(中国の東北部)を占領しました。韓国(注)を勢力下におこうとしていた日本は、ロシアに大きな脅威を感じ、アジアの各地でロシアと対立していたイギリスに接近しました。そして1902年、イギリスと日英同盟を結びました。</p> <p>(注)朝鮮は1897年に、国号を大韓帝国(韓国)とあらためました。</p>	<p>韓国の中立宣言に言及しているのは他の教科書に見られない特徴であり、韓国政府の主体的外交努力に配慮しながら日露戦争の過程を考察させようとしているという点で高く評価できる。</p> <p>日露戦争における日本の勝利について、欧米の反応、アジアの反応が簡潔にかつバランスよく示されている。</p>
	130	日露戦争のはじまり	<p>ロシアは満州から兵を引き上げる約束を守らず、さらに韓国にも勢力をのぼしてきました。韓国を支配下におこうとしていた日本は、ロシアと外交交渉をすすめて、日本の要求を認めさせようとしていました。日本国内では多くの新聞が、すぐにロシアと開戦するよう主張しましたが、財界は慎重論をとえ、社会主義者などの間には、戦争に反対する声もありました(注)。</p> <p>ロシアとの話し合いはなお、つづけられましたが、結局まとまらず、1904(明治37)年2月、日本軍は旅順を攻撃し、中立を宣言していた韓国の仁川に上陸して、日露戦争が始まりました。……</p> <p>(注)キリスト教徒の内村鑑三、社会主義者の幸徳秋水らが非戦論をとえましたが、国民への影響力は弱いものでした。</p>	
	131	日露講和と国際的影響	<p>そこで日本政府は、アメリカに講和のなかだちをもとめ、1905年9月、アメリカの軍港ポーツマスで講和会議がひらかれ、ポーツマス条約が結ばれました。この結果、ロシアは、日本が韓国を支配すること、遼東半島の租借件や南満州鉄道の権益を日本に譲ること、南樺太を日本の領土にすること、などを認めました。……</p> <p>日本がロシアに勝ったことは、アジアの民族に独立への希望をあたえました。そして、日本の東アジアでの影響力は大きくなり、欧米諸国は、日本を新しいライバルとして警戒するようになりました。また、韓国や中国では、日本の東アジアでの勢力拡大に反対する民族運動が活発になりました。</p>	
清水書院	166～167	日露戦争	<p>日露戦争後の朝鮮では、三国干渉の結果、改革を指導していた日本の権威は弱くなり、ロシアの勢力が強まった。いっぽう、清では、ヨーロッパの強国が争って港湾都市を租借し(注1)、鉄道建設や鉱山開発の権利を手に入れた。ロシアはシベリア鉄道の完成にさきだつて、支線を満州(中国東北部)を通して日本海岸まで引き、さらにその途中から大連まで南下させる権利を手に入れた。1900年には中国民衆が西洋勢力を排斥しようと義和団運動をおこして失敗したが、そののちロシアは満州に大軍をおくようになった。日本は朝鮮(韓国)(注2)もロシアにうばわれるのではないかと心配しはじめた。</p> <p>このため日本は、日英同盟(1902年)をむすんでロシアをけん制するいっぽう、ロシアに対しては満州をロシア、韓国を日本の勢力圏にしようと提案した。ロシアがこれを拒むと、1904年、日本は開戦にふみきつた。この日露戦争は、はじめ日本に有利にすすんだが、日本は武器・食料などがとぼしかったため、外国から借金をしてようやくつづける状態だった。また、ロシアも本国で革命の機運が高まったため、早く戦争を終える必要があった。そこで翌年、アメリカ大統領の仲介で条約がむすばれ、ロシアは日本に、①韓国における指導権をみとめ、②遼東半島南部の旅順・大連租借権と長春以南の鉄道をゆずり、③樺太(サハリン)の南部をゆずることにした(ポーツマス条約)。</p> <p>日露戦争は、日本の韓国支配を確保させ、中国・ロシアからも領土をうばった。その反面、隣国以外のアジア・北アフリカの人びとは、非白人国家がはじめて白人国家を破った事件として大いに注目し、勇気づけられた。</p> <p>(注1)長期で借りた一部の領土(おもな港とその周辺地域)。事実上の領土支配を意味した。 (注2)朝鮮は、1897年に大韓帝国と名称をあらため、国王を大韓皇帝とした。</p>	<p>義和団事件の扱いが他の教科書と比べて小さい。甲午農民戦争についてもその取り扱いが十分ではなかったことも併せ考えると、アジアの民衆運動に対する評価が総じて弱いように思われる。なお、ロシアは義和団鎮圧過程を通じて「満州」への派兵を進めており、事件後派兵を進めたかのように受け取れる記述は正確ではない。</p> <p>一方、日露戦争の勃発原因については満韓問題が日露間の焦点になっていることを明示しており、また日露戦争要図とあわせて満州・韓国が主戦場となったことは理解できる記述となっている。しかし「朝鮮(韓国)もロシアにうばわれるのではないかと心配しはじめた」との記述は、無前提に日本政府の立場に立って日露開戦を説明しようとするものであり、朝鮮の主体性を考慮に入れていないという点で問題がある。</p> <p>【総論】参照。</p>

帝国書院	173	日露戦争	<p>義和団事件ののち、ロシアはシベリア鉄道の建設を進め、「満州」(中国東北部)へ軍隊をおくるなど南下をおしすすめていました。それを阻止しようとする日本とイギリスの利害が一致し、1902年、日英同盟が結ばれました。ロシアとの交渉も行われましたが決裂し、日本ではロシアとの開戦を主張する声が強くなりました。戦争反対の声もありましたが、1904年、日露戦争がはじまりました。</p> <p>戦争は、おもに朝鮮半島と「満州」を戦場として行われました。……1905年、アメリカのポーツマスで講和会議が開かれました。そこで結ばれたポーツマス条約では、日本の朝鮮に対する優越権が承認され、日本は長春・旅順間の鉄道と旅順・大連の租借権、そして南樺太をロシアから得ました。</p>	<p>なぜ、中国や朝鮮が日露戦争の主戦場になったのかについて本文および地図から理解することのは難しい。義和団事件以降の満韓問題の動向について言及する必要があるのではないか。</p> <p>本文において、日露開戦の理由について満州問題のみを取り上げており、韓国問題の存在を看取することができない。したがってなぜ朝鮮半島が戦場となったのかについて理解することが困難となっている記述である。一方、日露戦争における勝利がアジア諸国に与えた影響を、肯定的・否定的に取り上げた点は評価できる。また日露戦争における日本の勝利に対するアジア諸国の見方が、具体的にかつ恣意的操作なく提示されている点は評価できる。</p> <p>【総論】参照。</p>
	173	【コラム】	<p>開戦論 —東京帝国大学の七博士</p> <p>ロシアは朝鮮に問題をおこそうとしている。なぜなら、争いの中心を朝鮮にすれば、満州はもうロシアの勢力範囲にあるとみなさうからだ。したがって極東の問題は満州の保全にかかっている。……われわれがこの開戦の機会をのがすならば、日本はその存立をもちやしくしてしまうことを自覚しなければならない。(『東京朝日新聞』1903年6月24日)</p> <p>非戦論 —内村鑑三</p> <p>私は日露の非開戦の論者であるだけではない。戦争に対して絶対的な反対論者だ。戦争とは人を殺すこと、そして人を殺すことは大罪悪である。大罪悪をおかして個人が利益を得ることは、永久にできるはずがない。……戦争廃止論はいまでは文明国の世論だ。戦争廃止の主張がない国は未開国だ。そう、野蛮国にほかならない。(『万朝報』1903年6月30日)</p>	
	174	日本の植民地支配	<p>日本が日露戦争に勝利したことは、植民地支配に苦しむアジアの人々に独立への希望と自信をあたえました。……</p> <p>一方、日本人の間には、日清・日露戦争などに勝利するなかで、日本人はアジアのなかですぐれていると考える人も増えてきました。そして、アジア諸国の期待とは異なり、日本は韓国(注)の植民地化を進め、陸軍・海軍の軍備を増強させるなど、帝国主義国としての動きを活発にさせていきました。</p> <p>(注)大韓帝国の略称で、朝鮮は1897年からこの名称を用いていました。</p>	
	175	【コラム】ネルーが娘に語った歴史	<p>日本のロシアに対する勝利がどれほどアジアの諸国民を喜ばせ、こおどりさせたかということとわれわれは見た。ところが、その直後の成果は、少数の侵略的帝国主義諸国のグループに、もう一国をつけ加えたというにすぎなかった。そのにがい結果を、まず最初になめたのは、朝鮮であった。</p>	
東京書籍	158	義和団事件	<p>このとき「義和団事件」を指す —引用者注)ロシアは、事件の後も大軍を満州にとどめて事実上占領し、さらに韓国への進出を強めました。</p>	<p>ロシアの「韓国への進出」の内容が具体的に示されていないので、日露開戦の原因を一方的にロシア側に求めているように読める点は問題であろう。また、日露戦争と韓国との関連性がほとんど理解できない内容となっている。この点は、次の韓国併合にもつながる部分なので、日露戦争勃発の経緯を明確に記述する必要があるだろう。</p> <p>【総論】参照。</p>
	158～159	日露戦争	<p>1904年2月、日露戦争が始まりました。日本軍は苦戦を重ねつつも戦局を有利に進め、奉天会戦や日本海海戦で勝利をおさめました。しかし日本の戦力は限界に達し、ロシアでも革命運動が起こるなど、両国とも戦争の継続が困難になりました。その結果、アメリカの仲介により、1905年9月にポーツマス条約が結ばれ、ロシアは、(1)韓国における日本の優越権を認め、(2)旅順・大連の租借権、長春以南の鉄道利権を日本にゆずりわらし、(3)北緯50度以南の樺太の割譲と、(4)沿海州・カムチャッカ沿岸の日本の漁業権を認めました。……</p> <p>日露戦争での日本の勝利は、インドや中国などアジアの諸国に刺激をあたえ、日本にならった近代化や民族独立の動きが高まりました。いっぽう、国民には、日本が列強の一員になったという大国意識が生まれ、アジア諸国に対する優越感が強まっていきました。</p>	

日本書籍 新社	160～ 161	日英同盟	ロシアは義和団事件ののちも、満州から軍隊を引きあげず、朝鮮にも支配力を強めようとした。日本は朝鮮の支配を目指していたので、ロシアとの対立がはげしくなった。日本とロシアの間では、ロシアが満州を、日本が朝鮮を支配下におくという交渉もおこなわれたが、まとまらなかった。そのころイギリスは、ロシアの東アジア進出に対抗する同盟国を求めている。そこで1902年、中国でのイギリスの利益と、中国・朝鮮での日本の利益を守ることを認めあって、日英同盟が結ばれた。これによって日本とロシアの対立はさらに深まった。	満韓問題で日露が対立する経過が簡潔にまとめられており、日露戦争勃発の背景を理解する上で適当である。ただ、近年の研究において、日英同盟は必ずしも日露の対立をもたらすものではなかったとの見解が示されている点を考慮すると、こういった見解をどのように反映させるかという課題は残る。
	162	ポーツマス条約	1905(明治38)年、アメリカのポーツマスで、日本とロシアの講和会議が開かれ、ポーツマス条約が結ばれた。この条約で、ロシアは韓国(注)に対する日本の支配権を認め、ロシア領であった樺太の南半分を日本の領土とした。また、ロシアは中国から借りていた旅順・大連と、満州に建設していた東清鉄道の一部を日本にゆずった。 (注)1897年、朝鮮は国号を大韓帝国と改めていた。	日露戦争に対する賛否両論を取り上げることで、ロシアへの対抗上朝鮮半島を押さえなければならぬとする意見が一面的なものであったことを理解することが可能になっている点は評価できる。 【総論】参照。
	171	【さらに深める学習】日露戦争をめぐるさまざまな意見	戦争を主張する意見 1.東京帝国大学の戸水寛人ら7人の博士たちは、次のような意見を新聞や雑誌に発表しました。 「もしロシアが満州に足場をつくれれば、次に朝鮮をねらうのは明らかなことで、朝鮮を征服したら、次にどこをねらうかはいうまでもない。だから、満州問題を解決しなければ朝鮮があぶない。朝鮮があぶなくなれば、日本の防衛はできない。」 戦争に反対する意見 1.内村鑑三は述べました。「日清戦争の結果は、わたしにつくづく、戦争は害があって益がないことを教えました。日清戦争によって、朝鮮の独立はかえってあやうくなり、戦勝国日本の道徳はたいそう腐敗しました。敵国を征服することはできても、足尾鉍毒事件のように国内を乱すものを取りしめることもできません」	

日本文教出版	139	日露戦争	<p>満州と韓国をめぐる日本とロシアとの交渉が行きづまると、戦争の危機が高まった。国内では、開戦・非戦の声がおこったが、三国干渉によるロシアへの反感から、開戦の声が強まった。……</p> <p>1904年2月、日本はロシアに宣戦布告し、日露戦争がはじまった。日本軍は、満州で苦戦を重ねながら勝利し、日本海での海戦ではロシアの艦隊を破った。しかし、日本は兵力や弾薬が欠乏し、ロシアでも皇帝の専制政治に反対する革命運動がおこっており、両国とも戦争の継続は困難となっていた。</p>	<p>日露戦争の開戦理由、講和条約締結時の日本政府の優先順位を考慮すれば、韓国における日本の支配権をロシアに認めさせたという記述は冒頭で述べられるべきであり、補足的になされているのは妥当ではない。事実が書かれていればいいというものではないのではないか。</p> <p>また、七博士の意見は強硬論の典型例であり、日露開戦をめぐる賛否が併記されるべきであろう。朝鮮半島を地政学的な安全保障の観点から見る「満韓不可分論」のみを掲げるのは妥当ではない。</p> <p>【総論】参照。</p>
	139	ポーツマス条約	<p>アメリカに講和のあっせんを依頼していた日本は、アメリカ大統領の仲立ちで、1905年、ポーツマスで講和条約を結んだ。この条約で、日本は樺太(サハリン)の南半分を領土とし、ロシアが持っていたリャオトン(遼東)半島南端の租借権と、チャンチュン(長春)以南の鉄道の権利をゆずり受けた。また、韓国における日本の支配権を、ロシアに認めさせた。</p> <p>その後、日本は、南満州鉄道株式会社を経営し、沿線の炭鉱や鉱山を開発するなど、南満州に権益をもった。当時の大國ロシアに対する勝利は、日本の国力を外国に認めさせることになった。アジアの多くの民族は、日本の勝利に力を得て、植民地支配からの解放をめざす動きを高めた。</p>	
	139	【コラム】主戦論	<p>東京帝国大学七博士の意見書(一部の現代語訳)</p> <p>ロシアはひとたび満州を占領すれば、つぎに朝鮮に進出するのはだれの目にも明らかなことである。また、朝鮮が占領されれば、つぎにロシアの眼がどこに向くかもうまでもないことだ。だから、今日満州問題を解決しなければ朝鮮もまた危く、朝鮮が危ければ日本の防衛も不可能となってくる。その場のがれの政策ではなく、いまの時点において、最後の決心をもってこの大問題を解決する必要がある。(1903年6月24日「東京朝日新聞」)</p>	
扶桑社	166～167	日露開戦と戦いのゆくえ	<p>日本の10倍の国家予算と軍事力をもっていたロシアは、満州の兵力を増強し、朝鮮北部に軍事基地を建設した。このまま黙視すれば、ロシアの極東における軍事力が日本に太刀打ちできないほど増強されるのは明らかだった。政府は手遅れになることをおそれて、ロシアとの戦争を始める決心を固めた。</p> <p>1904(明治37)年2月、日本はロシアの軍艦に攻撃をしかけ、日露戦争の火ぶたを切った。戦場になったのは朝鮮と満州だった。1905年、日本陸軍は苦戦の末、旅順を占領し、奉天会戦に勝利した。……</p>	<p>ロシアの満州駐屯およびロシア脅威論が必要以上に強調されている点は問題である。「ロシアの極東における軍事力が日本に太刀打ちできないほど増強されるのは明らかだった」との記述は、当時の意見を事実であるかのように記述している点で問題がある。一方、日本がロシアに先制攻撃をしかけたと記述するなど日露開戦経緯が記述されている点は他の教科書に見られない重要な指摘である。</p> <p>日露戦争を「日本の生き残りをかけた戦争」と一方的に自衛戦争として描き、帝国主義戦争としての性格、その侵略性について覆い隠すような記述は問題がある。</p> <p>日露戦争の勝利が、被植民地民族に希望を与えたことも事実であるが、その希望を日本が裏切っていくことも併記されるべきである。この点は、帝国書院版教科書がその点も取り上げていることと好対照である。ネルーの文章を自説に都合よい部分のみ取り上げており、日露戦争およびその後のアジア侵略を正当化しようとするものにとらえられかねない記述となっている。</p> <p>【総論】参照。</p>
	167～168	世界をかえた日本の勝利	<p>この条約で日本は、韓国(朝鮮)(1897年、朝鮮は国号を大韓帝国と改めた)の日本による支配権をロシアに認めさせ、中国の遼東半島南部(のちに、日本は関東州とよぶ)の租借権を取得し、南満州にロシアが建設した鉄道の権益をゆずり受け、南樺太の領有を認めさせた。……</p> <p>日露戦争は、日本の生き残りをかけた戦争だった。日本はこれに勝利して、自国の安全保障を確立した。近代国家として生まれてまもない有色人種の国日本が、当時世界最大の陸軍大國だった白人帝国ロシアに勝ったことは、植民地にされていた民族に独立の希望をあたえた(注1)。しかし、他方で、黄色人種が将来、白色人種をおびやかすことを警戒する黄禍論(注2)が欧米に広がるきっかけにもなった。</p> <p>(注1)ヨーロッパでも、長年ロシア帝国に抑圧されていたフィンランド、ポーランド、トルコの人々は、日本の勝利を熱烈に歓迎した。</p> <p>(注2)日清戦争後、すでにドイツ皇帝ウィルヘルム2世などが主張していた。</p>	